

『ハガート』

ハガート家の領国であるキリル子爵領の都城ゾランは、ヤニースの都城トリスよりも遥かに栄えた都市だ。農地に恵まれていないのがキリルの特徴なのだが、大きな湖であるパラーム海に面しており、山岳地帯から伐採される木材や、鉱山から採れる鉄鉱石、希少金属類、それらの加工品を交易する都市であるので、防衛戦のみを考えたトリスとは規模も違っていた。

リュイーズはここでフォリヴァス家への手紙を異なるルートで三通ほど送った。

彼女が魔術師であるならば、こんな手間はかけなくても済むのだろうか、

しかし宰相大公の側近であるリュイーズの能力は、下手な魔術師以上であった。

その事は一緒にヤニース家に取り込んでいって彼女の仕事をつぶさに見届けたポルメリアには、はっきりと理解できた。

事実、彼女は飛脚に手紙を託す為だけにゾランに立ち寄ったというのに、

彼らと話すだけで領主ハガート家が抱えている問題を把握していた。

「ハガート家の居城はキリルの北にあるカラム子爵領のタリームにあります。道すがら成り行きを説明しましょう」

麗しい娘二人だが、二人とも歩く事には慣れている。

キリルからカラムへの山越えの峠道で、行き交う人も少なくなったところでリュイーズは話し始めた。

「そもそもこの起こりは暗殺された先代当主、モディウス・ハガート殿が後継者に恵まれなかったという事です。

三十代も半ばを過ぎても男の子に恵まれなかったのですよ。二人ほど生まれましたが、いずれも一年と育たなかったようです」

子供の死亡率は高い。流産、死産を乗り越えても衛生面や食糧事情の関係で育たない子は多いのだ。

ハガート家は七大公の末裔で大諸侯だから比較的恵まれていると言えるが、しかしこればかりは運だ。

淡々と語るリュイーズとは違い、生真面目なポルメリアは眉をひそめた。

以前ならリュイーズはそんな彼女を偽善者と嫌っただろうが、ポルメリアにはそんな器用な真似はできない。

それが彼女の可愛いところなのだろうと、リュイーズも理解した。

「困ったモディウス殿は弟の子マルース殿を養子に向かえ彼を後継者としました。

諸侯は後継者を用意する義務があります。

もしも後継者なくして死ぬ事になれば、僅かな係累しかない親類縁者がこぞつてその遺産を奪い取ろうと争い始めるでしょう。そうなれば領国は空中分解、破滅です。

これでモディウス殿に息子が生まれなければ良かったのですが、ところが五年後に彼の妾の一人が男の子を産んだ。シデイス殿です。情況は一変しました。

まあ最初に後継ぎに指定したマルース殿を後継者と再確認して、

シデイス殿を神官か、あるいは分家にしてしまえば問題も少なくて済んだのでしょうかけれど、

モディウス殿にとってはやっと得た息子です。しかも健康に成長してくれた。

本音を言えば甥よりも実の息子を後継ぎにしたいところでしょう。

だが後継者に定められて既に五年過ぎたマルース殿には、ハガート家に仕える家臣の支持があります。

その一方で母親の身分が低いために明確な後ろ盾のないシデイス殿には有力家臣たちがつきまです」

「何故？」

「マルース殿の父君は亡くなっています。彼はその嫡子です。母方は有力な諸侯。マルース殿が母方の諸侯の後ろ盾を得る事は必至です。ひょっとしたらハガート家の中枢を握ろうとするかも知れない。そうならば今までハガート家を支えてきた有力家臣は失脚する恐れがあります。」

ところがマルース殿を支持するのは新興家臣団であり、このところ成長著しい商人階層です。マルース殿の母方はパラム海を牛耳るモンフェロール家ですね」

パラムの制海権を握る相手と懇意にしなければ交易商人たちは安全に商売をする事ができない。因らずもハガート家は新旧両勢力が角突きあわせる事態になってしまったわけだ。

「もちろんモディウス殿に強固な意志があるならば、問題も小さく済んだかも知れません。」

後継者をシデイス殿に指名し、マルース殿には、ほら先ほど後にしたゾランの城代なりを命じて中枢から外せばよかったです。ご自分とマルース殿の父君ともそういう関係だったのですから。

ところがそれをやった後、商人階層がどう動くか解らないのが不安だったのです。

ハガート家の所領は農耕地よりも商工業地が多い。新興の商人階層を完全に敵に回すのは命取りだ。それで迷っていたのです。

結局その迷いが致命的な命取りになってしまったわけで・・・」

「モディウス殿の？」

「いいえ、ハガート家の、ですよ。タリムではマルース派とシデイス派が毎日論争を繰り返しているそうですよ。」

マルース殿を支える商人階層は金は持っていますが、

また船を持っていますから水軍力があっても騎士が少ないですから陸上戦力が少ない。

一方のシデイス派は騎士階級が多いので戦力としては問題ないのですが、マルース殿の後にいるモンフェロール家の動き、そしてここ数年の不作で商人たちに借金している者が多いので、派閥の中でも意見がまとまっていない様子」

騎士といっても大部分は大土地所有者だ。土地のほとんどは農地として使われている。

天候不順や戦の為に、中原でもここ数年間は作物の収穫が芳しくない。

争いしている場合ではないのだが、てっとりばやく困窮を解決するのは他人の財産を奪う事なのだから、ますます戦火は耐えない。

ボルメリアは溜め息をついた。

「争う種には事欠かない、か・・・」

「しかしまあ、場合によってはその方が話を進めやすいかもしれません」

「何を？」

「いや、それは私の仕事ではありませんでした。私たちの仕事はモディウス殿殺しの犯人を見つける事ですから」

しかしボルメリアにもリュイズの言いたい事が解るような気がした。

フォリヴァス家がハガート家の内紛に介入し、自らの推す後継者に跡を継がせれば、有力な反フォリヴァス家の一角、ハガート家を自らの同盟者に引き入れる事もできるだろう。

フォリヴァスが覇権を打ち立てれば、結果として平和となる。

リュイーズの言い分も理解できる。それが戦なしで実現すれば民衆にとつても喜ぶべき事かも知れない。
・・・フォリヴァスに屈服を余儀なくされる諸侯の誇りさえなければ。

ポルメリアは貴族の生まれだ。例えば育ったのが宮廷ではなく、騎士団の宿舎であったとしても青き血を持つ者の責務と誇りは常に叩き込まれてきた。

理屈は解る。しかし感情が納得しない。

ポルメリアの眉間に再び深い皺が刻まれた。

「不満ですか？」

黙り込んだ彼女の様子を見てリュイーズが尋ねる。だがポルメリアは首を振った。

平和になるならば何の不満があるのだろうか。しかし、それでも・・・。

「すみません。解ってはいるのです。けれども、やはり・・・フォリヴァス家の野望を正しい事だと言う事は、私にはできない・・・」

そんな彼女の言葉を聞いてリュイーズは苦笑した。失笑ではなかった。

「素直ですね、貴女は」

「そうですね？」

「正しいと解っていても感情が邪魔をする事は、よくあります。私はそれを口にした事はありません。

口に出してもどうにもならない事を喋る気はありませんから。

その点、貴女はどうにも不器用だ」

「そうですね。そう思います。でもそうする他に私はできないのです」

眉間に皺を寄せたまま、自分の事をもどかしく思っているらしいポルメリアは腹立たしそうに呟いた。

だがそんな彼女の頬にリュイーズが指先で触れた。驚いたポルメリアはまじまじとリュイーズを見詰める。
構わずリュイーズはポルメリアの頬を優しく撫でた。

「人は、その人なりの生き方しかできないものです。気に病む事はないわ」

「それでも・・・私は何か下らない事に時間を費やしているような気がして、とてももどかしいのです。

私にはある力を善なる軍神から授かりました。それなのに、私は本当にそれを使いこなしているのかどうか、とても不安になる。

私は、本当に人々の為に役に立っているのでしょうか？」

だがそんな質問にリュイーズでなくとも答えられる筈がなかった。安易に慰める事はできるだろう。

しかしそれで満足するポルメリアなら、ほとんど四六時中自問自答を繰り返す事はない。

捨てられた子犬のように頼りない彼女の瞳をリュイーズは見詰めた。

これがトリスの城でハロルド・タイガスを威圧した同じ青い瞳であるとは信じられなかった。

今の彼女は年相応の少女でしかなかった。

ゆつくりとリュイーズは言葉を選んだ。

「もし貴女がフォリヴァスの為に戦うというのならば・・・いえ、どこかの諸侯や政府の為に戦っているのなら答えは簡単よ。でも、貴女の問いに私は答えられないわ。貴女は一体誰の為に戦っているの？ その質問は、貴女が守ろうとしている誰かに問うべきだと思う。貴女はちゃんと、守ろうとしている人たちと向き合っているのかしら？」

言われてポルメリアは更に考え込んでしまった。

反発する事なく素直にリュイーズの言葉を受け取り、そして生真面目なまでに反省している。

リュイーズは思わず声を立てて笑ってしまった。

「なんですか？」

不審そうなポルメリアの顔を見て、リュイーズは慌てて口を押さえた。

「いいえ・・・貴女は可愛いのですね」

言われてポルメリアは、自分が何を聞いたのか理解できないという顔をした。実際理解できなかったのだ。誰かに『可愛い』と言われるなんて。

「・・・それは・・・どういうことでしょうか？」

「ごめんなさい。そう思っただけよ。貴女は素直で、生真面目で、可愛い。そう感じただけなんです。侮辱と受け取られたなら謝りますわ」

「いえ、そんな事はないのですが・・・いや、可愛いなどと言われた事は初めてでして・・・可愛い？私か？」

自分で繰り返して言ってみて、ようやく何を言われたのか理解したらしいポルメリアは、その冴え冴えとした白い頬を思わず赤く染めた。

それは桃の花のように鮮やかで、まともにリュイーズの顔を見れないくらいに照れていた。

幼い頃から訓練と戦いの中で過ごしてきた彼女は、その容姿を持ちながら、今までこのような言葉を言われ慣れていないようだ。その事に思い至ったリュイーズには余計痛ましく感じられた。

彼女は、善なる軍神に捧げられたばかりに、娘らしい経験を何一つせずに、剣を振り、ただ人々の為に戦っているのかと言う事を自問しながら生きてきたのだ。

それは悲しいほどに殺伐とした人生だった。リュイーズはポルメリアの言葉を聞いてその思いを強くした。

「すみません。取り乱してしまいました。もう、大丈夫です」

耳まで真っ赤にしながらポルメリアはそう呟いた。

「謝る必要なんてないわ。私たち年頃の娘が『可愛い』と言われて喜ぶのは当たり前前のだし」

リュイーズにそう言われてポルメリアは激しく瞬いた。

「・・・喜んでいるのでしょうか、私は」

「そんな事も解らないの？可愛いと言われて怒らないなら、顔を真っ赤にするなら、私は喜んでいると思うけど」
「そうなんですか？」

「少なくとも、私は可愛いと言われると嬉しいわ。 もっとも、もう何年もそんな言葉は聞いていないけどね」

「私はそういう事を言われた事がないので、よく解らないのです」

僅かにポルメリアは苦笑した。恐らく、それどころではない人生だったのだろう。
同情はするが、しかしリュイーズは少しばかり叱りつけるようにいった。

「ダメねえ。そんな風に人生を苦しい方へ、苦しい方へ考えちゃダメなのよ。
いい？貴女は女の子なのよ。それもちよつとやそつとではお目にかかれないうような美少女！
そんな女の子が人生、墓場みたいな考え方してはいけないわ。男の人に憧れたり、
好きになったりした事はないの？恋は人生を豊かにしてくれるスパイスよ」

「・・・憧れていた人はいました。でも彼は私とは違う道を歩んでしまった。私はその人を殺しました」

ポルメリアの脳裏に浮んだのはランキン侯爵の騎士団にいた当時のランカスターだった。
剣の師匠であり父親のように彼女は慕っていた。
それなのに彼は人々を虐げる圧政者になって、彼女の刃に倒れた。それが全てだった。

彼女の不運は筋金入りかも知れないとリュイーズは気の毒に思う。
それが『天使の眷属』として人ならざる力を手に入れた代償だというのならば、あまりにも残酷過ぎた。
だがリュイーズは却って明るく言った。

「・・・まあ、過ぎてしまった事は仕方ないわ。人生はこれからも続けし、生きているなら、幸せになりたいじゃない。
貴女にだってその権利はある筈よ」

「そうでしょうか？」

「貴女を不幸にする為に善なる軍神はその力を授けた訳ではないでしょう？前向きになりなさい。
ポルメリア・ランキン。・・・いや、これは口が過ぎましたかな？ご無礼をば、ランキン卿」

少しおどけてリュイーズは峠道で謝罪の礼を取った。微かにポルメリアは微笑んだ。

「もう卿はやめて下さい。確かに騎士身分ですが、誰を支配している訳でもなく、ましてや貴女よりも年下です。
ポルメリアで結構ですよ」

「それは光栄です。では私の事もリュイーズ・・・リュウとお呼び下さい。
この呼び方は両親と宰相大公閣下以外誰も知らないですよ」

峠道に誰もいない事を大袈裟に確認してリュイーズは囁いた。それを見てどうとうポルメリアも声を出して笑った。

「では私も、ポリーと呼んで下さい。孤児院の子供たちにはそう呼ばれているのです」

「解りました。ではポリー、ご足労ですがハガート家の居城タリームに参りましょう。日のあるうちに辿り着かないと、中に入れてくれませんよ」

澄ました顔で大仰な身振り手振りでリュイーズは彼女を促す。クスクス笑いながらポルメリアも応じた。

「解りましたリュー。城の外で野宿としては咎められますからね」

「特使であると訴えても聞いてくれませんよ。夜明けの開門まで野宿して待つ使者なんて、格好悪いじゃないですか」そう澄まして言った後、リュイーズはケラケラと笑い出した。ポルメリアもそれに続いて笑い出した。そして二人は峠の山道を勢いよく走り出した。

どうしておかしくなったのか、ポルメリアには良く解らなかった。けれども、そういえば孤児院の子供たち以外に彼女の開けっ広げな笑顔を見た者がいるだろうか？

たぶん自分は幸運な最初の者なのだろうとリュイーズは彼女の笑顔を見て思った。年相応の明るい笑顔が美しかった。

どうして皆、こんな素敵な彼女の笑顔を知らずにいるのだろうか？リュイーズには、それが彼女や人々にとって不幸な事だと思えた。

平和な世界ができたなら、きっと彼女も眉間に皺を寄せるなんて事をせずにはすむに違いない。

リュイーズはなんとなくそう思った。

予想に反してタリームの城は二人の娘を何の咎めもせずに迎え入れた。

だが流石に歓迎しているようには見えない。いや、むしろ不気味な静けさが城の全てに満ちていた。

嵐の前の静けさというべきなのだろう。城の中庭を通って当主の謁見の間があるメインキープ、

主天守閣に案内されている間、ポルメリアはいくつもの窺うような視線を感じていた。敵意ではなく好奇心でもない疑惑の視線だ。

謁見の間への扉の前で二人は待たされる。そこでリュイーズは囁いた。

「誰も彼も私たちの用向きを知りたがっていますよ。」

むろん、フォリヴォスがどちらの派閥に肩入れしてくれるか、それを知りたがっているでしょう」

ポルメリアはうなずきながら尋ねる。

「フォリヴァス家はどうするつもりなのですか？」

「私には彼らの問いに答える権利はないのですが・・・ポリーならどう思いますか？」

リュイーズは悪戯っぽく笑っている。ポルメリアは首を傾げた。

「フォリヴァス家ならば、領主階層に支持されるシデイス殿よりも、商人階層に指示されているマルース殿に当主の座に座ってもらいたいのではないですか？」

「どうしてですか？」

「領主たちよりも商人たちの方が平和を望むものです。平和の価値を知っています」

「確かにそうですね」

武器商人以外の商人たちにとって戦が起らない方が商売が盛んになって有利になる。自分たちには有利な商取引をさせてくれるかぎり、商人にとっては支配者がハガートであろうとフォリヴァスであろうとあまり関係がないのだ。

領主にとっては戦こそが商売のようなもの。領民を守る戦いも、そして領民を豊かにするのも戦だ。他人の財産を奪うのが、もっとも手っ取り早い金儲けの方法でもあった。

リュイーズは続けた。

「モンフェロール家と縁戚関係にあるマルース殿が当主になりフォリヴァスの同盟者になれば大変心強いでしょう。しかしハガート領内の勢力では商人も領主も拮抗しています。

どちらが当主になろうとしても、血を見ることを避けられないでしょう」

再びポルメリアの眉間に皺が寄る。リュイーズは自分のようなものが彼女を笑顔から遠ざけているのだと、漠然としながら思った。

場の雰囲気少し悪くなったとリュイーズが感じた頃、ハガート家の廷臣がやってきた。

どうやら謁見の間に通してもらえらしい。目の前の大扉がゆっくりと開かれた。

ハガートはシヴァーズと並んで最も古い諸侯の一つだ。今でこそフォリヴァス家が天使王国宰相位を独占しているが、かつてはハガート、シヴァーズの両家が宰相位を交代で担っていた。その名残が広く豪華な謁見の間に残っている。

ただし、この広く豪華な謁見の間で二人の娘を待っていたのは、数人の廷臣たちだけだったのだが。

広く古びた謁見の間が空虚に感じられる。だが二人はその事に気を止めることなく、待ち受ける廷臣たちに向かった。

「用向きは了承しております。ランキン卿、ポントワ殿。亡きモディウス閣下を殺した暗殺者をお探し、との事で」

言葉使いは丁寧だが名乗る事もしなかった。二人を待ち受けた七人の廷臣たちは、それぞれがハガートの有力家臣なのだろう。宰相大公の側近とはいえ平民出の特使と、誰であろうと『悪事』を働く者を殺して回っている『城砦落し』。その二人をまともに扱う気は、やはり彼らにはないのだ。

だが二人とも気にしなかった。ヤニース家の時のように脅しや妨害を受けなければ、それでよかった。

「モディウス閣下が亡くなられた部屋を調べる事、そして当時の状況を知る為にいくつかの質問をお許し願いたいのですが」
そこで鋭い質問が廷臣たちから飛んだ。

「何の為に？」

「平和の為です。閣下を殺した相手を見つけ、正しき法の裁きを受けさせる。

そして新たなハガート家ご当主と未永く誼を結びたい。それこそが我が主の望みです」

リュイーズは立て板に水というように滑らかに返事をする。七人の廷臣たちは互いの出方を窺っているようだ。横目でそれぞれの挙動を監視しているように見える。

一番年かさの、一番押し出しの良い男が咳払いをした。そしてリュイーズに質問を続ける。

「それは・・・どういう意味ですか？」

「どう、とは？」

「隠していても始まらない。我がハガート家は亡きモディウス閣下の後継者選びで紛糾しております。閣下を殺した犯人を見つける事がどのような事になるか、お解りでしょう」

発言した男は、中立派なのかも知れない。

例えば、実の息子を後継者に指名しそうになっているモディウスを殺して利益があるのは誰か、と考えれば、それは養子に迎えられるが今では敬遠されているマルースという事になるだろう。少なくともシデイスが後継者として確定する事を防ぐ事ができる。

だがもしもそれが表沙汰になってしまったらどうなるか。今度は養父殺しとしてシデイス側がマルースを糾弾できる立場になる。そうなれば絶対に内乱は避けられない。

彼はその事を危惧しているのかもしれない。そんな事をポルメリアは思った。

「真犯人を見つけれ。それはよろしかろう。

だがフォリヴァスはその後どうされるのか？我々が懸念している事は、まさにそれなのです」

まさか暗殺者を見つけれ行為そのものよりも、フォリヴァスがどう動くのか、具体的に言えばハガート二人の後継者のどちらを支持するのか、という事の方が重要なのだとは、ポルメリアには思いも寄らなかつた。彼らにとっては、殺された主人の仇を討つよりも、派閥争いの行方の方が重要なのだ。

まさに彼らにとっては死活問題だろう。それは理解できてもポルメリアは寂しく思った。亡くなったモディウス・ハガートを悼む者は、今、この場にはいないのだ。

表向きリュイーズは動揺していない様子だ。ポルメリアよりも世辞に長けた彼女は、こういう展開も予想していたのだろうか？彼女はハガートの重臣たちの誰よりも若いと言うのに、余裕の笑みを浮かべていた。

「暗殺者を見つけれ、それを公表し、単独犯ならば処罰を、雇われた者であるならば黒幕を調べあげて糾弾せねばなりませんまい。フォリヴァス宰相大公閣下はそうにお考えです」

七人の廷臣は互いの顔を不安そうに眺めている。再び一番年かきの男が口を切った。

「犯人を見つけれ事が第一義とおっしゃるのですな。その結果、我らハガート家が領国を二分する争いになるかも知れないのに？」

しかしリュイーズは彼らの不安、不満を鼻で笑って見せた。廷臣たちにはさぞ高慢な仕草に見えたに違いない。だがポルメリアには彼女の言っている事の方に理があると思えた。

「ハガート家内部の問題で納まっているならば、我らフォリヴァスがしゃしゃり出る事はありますまい。

しかし同時にヤニース家世継ぎムラート殿も暗殺されているのです。偶然であるならばできすぎている。

お二人が殺された事により、ヤニースは反フォリヴァスの動きを強め、ハガートの皆さまは内紛を起そうとなさっている。

メルクス公爵家への抗議で一つにまとまった中原が、再び割れようとしているのです。それによって利益を得るのは一体誰なのか？

ヤニースと親しく中原の政界に積極的に介入しようとする南部の雄オウルバイン家か、

もしくは東部での戦争を有利に戦うために中原の混乱が望ましいウォレンサー家か、はたまた今回の抗議の対象となったメルクス公爵家かも知れません。

はっきり言える事は、ハガート内部の問題だけではなく、中原の平和そのものが脅かされているという事です。

その上で、我が宰相大公閣下は皆さまに宜しき様にハガートの問題に対して助言なされるでしょう。

それがフォリヴァスの立場です。お歴々の皆さま」

リュイーズの言葉は言ってみれば正論という奴だ。だがそれはフォリヴァス家の『正論』なのだ。シデイス派でもマルース派のそれでもない。

それでも彼女はどちらの派閥にも明確に味方するとは言わなかった。廷臣たちも文句を言う筋合いはない。

彼らは互いを窺うようにしながら、それぞれ同じ派閥の者たちとのみ、小声で話を始めた。だがそれほど長い時間はかからなかった。

年かきの男が他の者たちの意見を聞き、うなづく。彼が代表してリュイーズに答えた。

「フォリヴァス家の立場は了解した。我らも中原の平和を望む者。捜査には協力いたしましょう。

閣下が亡くなられた部屋、そして建物周辺の間取りをお教えするのはもちろん、

閣下の側近くに仕えていた者への尋問も可能な限り協力するよう取り計らいます。宰相大公閣下へは良しなお伝え下さい。

それでは」

もはやそれで用は済んだと男たちは引き上げていく。その後ろ姿にリュイーズは声をかけた。

「方々のお名前、未だお聞きしておりませんが？」

しかし男たちはそれで足を止める事はしなかった。対応をした男ですら振り返らずに行ってしまう。

ポルメリアの耳にはリュイーズの舌打ちが小さく聞こえた。

彼女達をモディウス・ハガートの居室に案内した者も騎士身分ではない。

これでは、彼女達を監視する為に有力家臣であるタイガス一族の者をつけたヤニースの方が待遇が上というものだ。

亡き当主の居室はメインキープの最上階にあった。窓からの見晴らしはいい。

奥方とは別居中であり、実子シデイスの生みの母親は息子と同居しているらしく、ここにはいない。

当主の私的生活を支えるのは騎士身分の執事ユザールと数人の平民出の召使だった。

ユザールの話によるとモディウスは馬上槍試合を開催している最中、殺害されたのだという。

ハガート家では年に一度、領内、あるいは他家の騎士を複数招いて盛大な馬上槍試合の大会を行っている。

主催者である当主が華やかな試合会場から離れる事はまずないのだが、今回は代理としてシデイス殿を立てたという。

言うまでもなく実子を後継者として周知させようという狙いだ。

モディウスは大会の表向きの顔をシデイスに任せてハガート家の諸問題、

各領地から送られてくる雑多な事務仕事を処理する為に居室にいたらしい。特に重要なのは領民の流出と飢饉の問題だった。

馬上槍試合の大会で領内の主要人物がタリームに集まる為、これらの問題を話し合うにはうってつけと思われたのだろう。

とはいえこもって一人で仕事をすることなく、執事のユザール他、開会の場や決勝戦や自分が推薦する騎士、身内の騎士が出る試合には席を外しても、モディウスと一緒に問題を検討しつつ裁可を下す要人が幾人かは必ず同席していた。

また彼らの用向きを伺う為の召使が、やはり数人出入りしている。

その日はタリームの城もそうだが、モディウスの居室にも人の出入りが激しかったようだ。

そしてモディウスはほんの僅かな時間、居室で一人になった時に殺害された。

ユザールはできた人物らしく、その情況、死因を正確に、しかし淡々と説明した。

後から左脇の下より鋭い刃物で刺され、やはり心臓を刺し貫いていたようだ。即死であったという。

「人の出入りがあったとはいえ、ごく僅かな時間の間だけ、閣下はお一人でいらしたとお聞きしましたが」

平民出のリユイーズの質問だが、ユザールは特にいやな顔もせず答えた。特に親しみを持っている訳でもなかったが。

「はい。あれは屋下がりですか。調度、私どもの本家筋の嫡男とシグナベル卿の配下が試合を行う頃合でして、関係する者は皆、試合を見る為に席を外しておりました。

そうですね、騎士身分以上で閣下のお供をされていたのは、ジロール卿ぐらいでしょうか。

ジロール卿が資料を取りに席を外してから戻ってこられるまで、それほどの時間はかかっておりません。

ジロール卿の領地では飢饉も領民の流失も酷うございまして、

この問題を閣下と特にご相談したいとメインキープの客間に卿は泊まっておいででしたから」

「しかし召使たちもその場にはいたでしように」

「係りの者は閣下より葡萄酒を所望されて、それを取りに席を外したと申しております。

その日は年に一度の祭りゆえ、葡萄酒も次から次へと振る舞われております。用意した樽の分がなくなったとの事で」

「では偶然閣下がお一人になられた時に殺された。そういう事ですね」

「お側に仕える者としては断腸の極みでございます」

そこでようやく殷勤なユザールに表情らしきものが浮んだ。主人の危機に席を外した事がよほど悔やまれるらしい。

「馬上槍試合の会場は城外ですか？」

「はい。何しろハガート全領国からはもちろん、近隣諸国からも多くの参加者がございます。タリームの城では手狭になります」

ハガートの領国は五カ国。しかし交通の要所や鉱山地帯が多い。領国の広さだけが豊かさではなかった。

豊かであれば大会参加者も多くなる。

「それでは城の宿泊施設だけでは間に合いませんね」

「はい。タリームの城下町はさほど大きくありません。大勢のお供を連れてこられた方は天幕を張っておられました」

「ではタリーム周辺は随分な人ばかり。それに城の内と外の出入りも自由・・・犯人を特定するのはなかなか困難ですね」

だがそういうリユイーズの顔には何かしらの自信が垣間見えたように思えた。

いくら出入りが激しいとはいっても、それは馬上槍試合に関する事だけだ。

メインキープの最上階に位置するモディウスの居室にいたるまで人込みがいる訳ではない。しかもモディウスが一人になったのは単なる偶然。

人々に気付かれずに居室付近に潜んでいて、好機を逃さず実行に移す以外に手段はないだろう。

それができるのは魔法か手だれの盗賊ぐらいたが、主要な諸侯の城には魔法防壁が何十にも張り巡らされている。透明化した何かが侵入して、モディウスを殺し、再度透明化して出て行くという事もありうるが、その間に城の魔法警報に一度も引つかからなかったというのは考えにくい。

やはり手だれの盗賊か、暗殺者が実行犯と見た方がいいだろう。

執事ユザールの元を辞して二人は帰ろうとする。その道すがらリュイーズは自分の考えをポルメリアに説明した。

「おそらくムフラート・ヤニース殺害犯と同一人物でしょう。

ならばそれぞれの家の問題で彼らを殺そうと考える人物は除外してもいい。

やはり敵は、中原七大公家の結束を嫌う、フォリヴァスの力が増大する事を恐れる者です。

まあ実行犯が判明すれば、それも自ずと解るでしょう」

「本当に？」

「もし別々の犯人なら、ほとんど奇跡のような偶然ですよ。殺害の手口も同じだし、情況もハガートの方が困難ですが、しかし手だれの暗殺者なら不可能ではない。

犯人さえ解れば、雇い主を吐かせる方法はいくらでもあります」

ポルメリアにとってリュイーズはそんなに嫌いな人物ではない。むしろ好きなのかも知れない。

しかし目的の為に手段を選ばない側面が彼女にはあった。そんなところだけは、少しついていけなかった。

リュイーズは彼女の顔色を見て何を考えているのか察した。そして少し微笑んだ。

「ポルメリア、貴女は善なる軍神の『兵士』であり、弱く力のない者たちの『守護者』たらんとしている。

私は違う。私は宰相大公閣下の目となり耳となり、時には手足ともなつてその平和と秩序の為に働く。貴女と私は違う。ただそれだけなんですよ」

「それは解っています。しかし・・・いや、やめましょう」

それはどうあつても歩み寄る事のない部分。二人はそれぞれの目的の為に生きている。

それが重なる時もあるれば、どうしようもなく離れてしまう時もある。仕方ない。それこそどうしようもない事なのだ。

それを認識する場面が再びやってきた。

メインキープから回廊を通つて城壁に出る通路で、二人は身分の高い若い男に呼び止められた。少年と言つていい年頃だろう。お付の者が何人もいる。先ほど謁見の間で名乗らずに去つていった廷臣のうち二人がその中にいる。

少年は名乗らなかつた。だが二人には思い当たる名前が一つだけあった。おそらく彼は、シディス・ハガートだろう。

「父上を殺した者を探しているというのは、その方たちか」

「左様でございますが、閣下」

リュイーズは丁寧に礼をする。しかしポルメリアはその場に立つたままだった。自分とそれほど変わらない年頃の少年貴族。

しかしその横柄な態度に少しばかり腹が立ったのだ。先方が礼を尽くさないのだから、こちらも答えてやる必要などない。

そんな冷たいポルメリアの雰囲気はシデイスにも理解できたのだろう。

だが少年貴族は少女騎士を無視する事に決めたらしい。話が通じる者と話せばいいのだから。

「フォリヴァスは、きっとマルースと手を組みたいのだろうか」

「確かに、マルース殿ならばフォリヴァス家と話が合うでしょう」

「しかし私もフォリヴァスをないがしろにするつもりはない」

「それはありがたいお話です」

「亡き父上の御意も私にあった」

「左様でございますか」

「ヤニースを黙らせる事にも協力しよう」

「穏やかな話ではありませんね」

「当然だ。私がハガート家を継ぐ事を、是非ともフォリヴァスには支持してもらいたいのだ」

交渉というよりも命令に近い言い草だ。

ポルメリアは溜め息をついたがリュイーズはそんな事に一々不快感を表したりはしなかった。

「閣下、そのようなお話は我が主となさっていただけませんか？私は一介のフォリヴァス家家臣。それも騎士身分ですらありません。宰相大公閣下が何をお考えであるのか、私如きでは図りかねる事。

どうぞ宰相大公閣下の居城アクワイアスにおいでくださいませ」

話に通じていないと見て少年は顔を赤らめて怒鳴った。

「そんな話をしていてのではない！その方は父上を殺した犯人を探しているのでしょうか、ならば我らではなく奴の手の者が手を下したと、そう報告してくれば良いのだ！」

「・・・奴とは？」

「決まっておろう！」

人を食べたリュイーズはあからさまに解らないという仕草をする。

いくら経験の浅い少年でも、この場で競争相手の名を告げるのははばかられるのだろうか、

その自制心もリュイーズの仕草で外れそうになる。それを落着かせたのは目付け役の廷臣たちだった。

彼らはシデイスの腕を掴みしきりに合図をする。少年はそれで深呼吸をし、我を取り戻した。

意外にシデイス・ハガートは性質の良い貴族になるかも知れない。

少なくとも他人の意見を受け入れ自分を押さえつける事はできるようだった。

「・・・失礼した。しかし、我々がどのような結果を求めているのか、理解できる筈だ」

「それはもう・・・しかし、私どもが欲しているのは真相です。その上で中原の平和を維持する事です。その結果が閣下の望むものであるよう努力はいたしますが・・・私に言えるのはそれだけです」

「どのような取引にも応じられぬと？」

「私は宰相大公閣下の下僕にすぎませぬ。閣下の御心にかなうよう努力するのが私の勤め」

リュイーズはあくまでも慇懃だった。そして一見してどんな取引にも応じないような態度を取っている。だが途中でポルメリアも気付いた。リュイーズは取引に応じられぬとは一言も言っていない。そして宰相大公の命に従い動くという。

ならば、取引は彼女ではなく宰相大公とすれば良いという意味にならないか？

その事に廷臣の一人も気付いたらしい。シデイスの耳元に囁き、彼は訝しく思いながらも最後にこう言った。

「そなたは公平に調べるといふのだな。そしてフォリヴァス大公の命に従うと。了解した。時間を取らせて済まなかった。亡き父上の仇、是非とも突き止めてくれ」

リュイーズが返事の代わり深々と頭を下げる。それを見届けているのかいないのか、シデイスと彼を支持する廷臣たちは、横柄にうなずいて去っていった。

同時に背後で慌しく人が去る気配がした。ポルメリアが振り向くと、二人ほどの廷臣が足早に去っていくではないか。彼らの正体はポルメリアにも察しがついた。おそらくマルース派の廷臣たちだろう。

「忙しい事だ」

「そうね」

やっと頭をあげたリュイーズが例の意地の悪い笑みを浮かべている。

「これでハガートでの仕事は大半終わったわ。

暗殺者の傾向も解ったし、ギルドに問い合わせてくれた仲間からの報告を受けるまで、少し時間があくわ」

「どうするの？」

「良かったらケルマディクに戻りましょう。あそこなら情報も集めやすいし連絡も受けやすいわ。最も大きな商業都市ですからね」

「それでいいのですか？」

「ギルド関係の窓口も多いし、好都合よ。ポリーもその方が嬉しいでしょう？」

「それはそうですが」

「じゃあ、決まりね」

嬉しそうにリュイーズは笑ってポルメリアの肩を押しタリームの城を出て行く。

確かにハガートでの二人の行動で戦いは一時休止になるだろう。

どちらの派閥も実力行使をするよりもまず、フォリヴァスの宰相大公を味方につけようと画策するからだ。その間は決定的な戦いにはなるまい。

戦いをする者が悪であるとは限らない。どちらか一方を滅ぼすばかりが戦いを止める手段ではない。ポルメリアはその事に今更ながら気がついた。

「勉強になります」

道すがらポルメリアが呟いた言葉にリュイーズは笑った。

「生真面目ねえ、ポリーは。まあお姉さんにしてみれば嬉しい限りだけどね」

笑い返してポルメリアは、イリネアたちと旅していた時の事を思い出していた。あの頃のように心が満ちていくのを感じた。

「閣下、そのようなお話は我が主となさっていただけませんか？私は一介のフォリヴァス家家臣。それも騎士身分ですらありません。宰相大公閣下が何をお考えであるのか、私如きでは図りかねる事。

どうぞ宰相大公閣下の居城アクワイアスにおいでくださいませ」

話を通じていないと見て少年は顔を赤らめて怒鳴った。

「そんな話をしているのではない！その方は父上を殺した犯人を探しているのであろう？ならば我らではなく奴の手の者が手を下したと、そう報告してくれば良いのだ！」

「・・・奴とは？」

「決まっておろう！」

人を食ったリュイーズはあからさまに解らないという仕草をする。

いくら経験の浅い少年でも、この場で競争相手の名を告げるのははばかられるのだろうが、その自制心もリュイーズの仕草で外れそうになる。それを落着かせたのは目付け役の廷臣たちだった。

彼らはシデイスの腕を掴みしきりに合図をする。少年はそれで深呼吸をし、我を取り戻した。意外にシデイス・ハガートは性質の良い貴族になるかも知れない。

少なくとも他人の意見を受け入れ自分を押さえつける事はできるようだった。

「・・・失礼した。しかし、我々がどのような結果を求めているのか、理解できる筈だ」

「それはもう・・・しかし、私どもが欲しているのは真相です。その上で中原の平和を維持する事です。その結果が閣下の望むものであるよう努力はいたしますが・・・私に言えるのはそれだけです」

「どのような取引にも応じられぬと？」

「私は宰相大公閣下の下僕にすぎませぬ。閣下の御心にかなうよう努力するのが私の勤め」

リュイーズはあくまでも慇懃だった。そして一見してどんな取引にも応じないような態度を取っている。だが途中でポルメリアも気付いた。リュイーズは取引に応じられぬとは一言も言っていない。

そして宰相大公の命に従い動くという。

ならば、取引は彼女ではなく宰相大公とすれば良いという意味にならないか？

その事に廷臣の一人も気付いたらしい。シデイスの耳元に囁き、彼は訝しく思いながらも最後にこう言った。「あなたは公平に調べるといふのだな。そしてフォリヴァス大公の命に従うと。了解した。時間を取らせて済まなかった。亡き父上の仇、是非とも突き止めてくれ」

リュイーズが返事の代わり深々と頭を下げる。それを見届けているのかいないのか、シデイスと彼を支持する廷臣たちは、横柄にうなずいて去っていった。

同時に背後で慌しく人が去る気配がした。ポルメリアが振り向くと、二人ほどの廷臣が足早に去っていくではないか。彼らの正体はポルメリアにも察しがついた。おそらくマルース派の廷臣たちだろう。

「忙しい事だ」

「そうね」

やっと頭をあげたリュイーズが例の意地の悪い笑みを浮かべている。

「これでハガートでの仕事は大半終わったわ。暗殺者の傾向も解ったし、ギルドに問い合わせしてくれた仲間からの報告を受けるまで、少し時間があくわ」

「どうするの？」

「良かったらケルマディクに戻りましょう。あそこなら情報も集めやすいし連絡も受けやすいわ。最も大きな商業都市ですからね」
「それでいいのですか？」

「ギルド関係の窓口も多いし、好都合よ。ポリーもその方が嬉しいでしょう？」

「それはそうですが」

「じゃあ、決まりね」

嬉しそうにリュイーズは笑ってポルメリアの肩を押しタリームの城を出て行く。

確かにハガートでの二人の行動で戦いは一時休止になるだろう。どちらの派閥も実力行使をするよりもまず、フォリヴァスの宰相大公を味方につけようと画策するからだ。その間は決定的な戦いにはなるまい。

戦いをする者が悪であるとは限らない。どちらか一方を滅ぼすばかりが戦いを止める手段ではない。ポルメリアはその事に今更ながら気がついた。

「勉強になります」

道すがらポルメリアが呟いた言葉にリュイーズは笑った。

「生真面目ねえ、ポリーは。まあお姉さんにしてみれば嬉しい限りだけどね」

笑い返してポルメリアは、イリネアたちと旅していた時の事を思い出していた。あの頃のように心が満ちていくのを感じた。